

発信箱：語学力より大切なこと

小国綾子（夕刊編集部）

毎日新聞 2013年06月04日

グローバルな人材育成のための英語教育論議が盛んだ。でも小学校から英語を学ぶと「グローバル」に育つのかなあ。鳥飼玖美子（とりかいくみこ）・立教大特任教授は「英語力だけでなく論理的に主張する力や異質な人への寛容さも育てなきゃ。英語力があっても自己主張できない、相手に理解してもらえないことってありますよ」。その一言に、米国にいたころの記憶がよみがえった。

原爆投下を正当化する米国の友人とやりあう時、私に必要だったのは英語力より、説得力のある知識であり、感情的にならずに語れる冷静さの方だった。野球チームで毎打席バントサインを出された息子に必要なだったのは「コーチの指示には黙って従うべし」という日本の常識にとらわれず「打ちたい」と訴えることだった。後日、コーチはこう言った。「サインを嫌がらないからバント好きと勘違いしていたよ。この国では、打ちたいなら打ちたいと主張しなきゃ伝わらない」

他人の気持ちをおもんばかることが大事な国もあれば、おもんばかることを良しとせず、言葉で理解し合う国もある。世界は広い。コミュニケーションの形もさまざまだ。語学力はもちろん大事。でも、もっと大切なのは語るべき内容を持っていること、分かり合いたいという情熱、そして異なる価値観や文化を面白いがるしなやかさではないか。

「グローバルの芽」を育てたいなら、小学生の通信簿に英語を加えるより、学校に多様性を吹き込む方がいい。地域の外国人に学んだり、英語だけでなく多様な外国語に触れたり。知らない世界の他者と分かり合いたいと願うからこそ、私たちは外国語を学ぶのだ。